天文教育フォーラム報告
「著作権—あなたの利益と不利益の間で」

2004年9月22日，表記のタイトルの天文教育フォーラムが，天文教育普及研究会と共催で年会期間中に開催された．

研究者であれば，論文はもちろんのこと，一般解説書や教科書，学会予稿などいろいろな文章を書く機会は多い．ところが著作権への関心や理解はいまひとつのようで，新聞でも，翻訳を自分の著作と偽って失職するなどの事件が報道されている．そこまで極端ではなくても，他人の図を自分の論文中に無断掲載する，二重投稿するなど，いろいろな事件が絶えない．これらの背景には，著作権の基本的な考え方への理解が不足しているのではないかと思われる．そこで今回のフォーラムは著作権をテーマにし，法律上の規定の詳細を云々するのではなく，研究者として執筆する立場にある人間にとって基本的な心構え，つまり「執筆の精神」に焦点をおいた．

基調講演は大槻義彦氏（早稲田大学，『パリティ』編集長）による「『パリティ』編集20年の経験から」である．大槻氏は，盗作や盗用は問題外であるが，著者の認識不足による「自覚のない盗作」が問題であるとして，その実例を二つあげた．

はじめの例は，あるラジオ番組が誤って再放送を流したとき，それが再放送であることを視聴者に断らず，また出演者やスポンサーの了解もとらずに再放送をする結果となったため，番組の責任者が処分される大問題に発展した事件である．同じ番組で，過去のものを流すのがなぜいけないのだろうか．聞いている人は再放送だとわかれば，そこでラジオのスイッチを切る可能性があり，宣伝を聞かない可能性があるため，スポンサーは損害を被る．また視聴者にとっては，その番組でしか聞けないものを聞こうと期待するので，過去に流されたものを断りなく放送するのは，その期待を裏切ることになるからである．

別の例は，大槻氏が監修をした理科の教科書である．若手の著者たちが書きおろしたはずの原稿を読んだとき，そこに大槻氏自身が執筆した別の教科書にある文章が，そのまま載っていたのを発見した．それを出版者に指摘したところ，「物理の内容など誰が書いても同じだから構わない」との答えが返ってきてあぜんとしたことである．これも読者に対する背信行為となっているのに，執筆者・出版者側に，その自覚がないことは大きな問題である．

最近，「パリティ」に掲載された記事と全く同じものが他誌にも掲載された事件が2度も続いた．そのつど編集長として，読者へのお詫びの言葉を載せた．執筆者は自分の非を認めておらず，遺憾である．読者はパリティでしか読めない記事を期待して雑誌を買う．自分の書いた原稿であっても，全く同じものを複数の雑誌に出してはいけない．著作権法に違反しているだけでなく，読者への背信行為であることを理解していただきたい．

以上の大槻氏の講演は，編集者として，また多くの著作の執筆者としての長年の経験に基づいた説得力ある内容で，ほのぼのとした語り口に引き込まれるものであった．質疑応答のときに，「同じ原稿を複数の雑誌に出してはいけないというが，どのくらい似ていれば『同じ』になるのか」という質問が出た．答えは，読者が読んだときに，違うという印象をもつことが大事であり，読者の立場に立って書いてほしい，である．（報告者注：現実的には，執筆をするとき，過去の原稿をもとにしてワープロでカット＆ペーストをすると，どうしても同じ部分が出てくるので，原稿を見ないで書けば，同じような内容でも，違う表現の原稿が

天文教育会場フォーラム会場の様子

できあがる．また読者層が違うなら，その読者層にみあう内容を心がけると違いが出やすい）

次に月報理事の土橋一仁氏（東京学芸大学）から「天文月報で研究者デビューを―宣伝効果と著作権問題」と題するコメントがあった．若手研究者にとって，月報に自分の研究の解説を書くことは，自分の研究の宣伝とともに職さがしという点からみてもメリットがあること，その際には，図の引用など著作権に抵触する部分に気をつけること，とのコメントと注意があった．

最後に，年会理事の土居　守氏（東京大学）のコメント「年会発表の波及効果」では，年会にはポストを探している若手だけでなく，人事権をもつ教授等も来ていること，そのため予稿集や発表のプレゼンを上手にすることが大切，研究内容が報道されるときには，報道解禁の設定がある報道機関に気を配ること，などのコメントがあった．

それぞれ講演，コメントともに，内容の組み立て方や話し方が明確で，講演自体がプレゼンテーションのお手本となっていた．参加者は220名で，会場が満員となりたいへん盛況であった．なお，参加者には「パリティ」のバックナンバーが配布された．

実行委員：田　　光江（情報通信研究機構，教育理事）
加藤万里子（慶応大学）
矢治健太郎（国立天文台/和歌山大学）
安藤　享平（郡山市ふれあい科学館）

加藤万里子（慶応大学）